

# 学力研の広場

ホームページアドレス <http://gakuryoku.info/>

2026.2.7

学 力 研 発 行

常任委員長 岸本ひとみ

ペイペイ銀行うぐいす支店 普:3607141

二匹の蛙がミルクの入った壺のふちのところで飛び跳ねていました。突然、ミルク壺に落ちてしまいました。一匹の蛙は、ああもう駄目だ、と叫んで諦めてしまいました。そしてガーガー泣いて何もしないでじっとしているうちに結局溺れて死んでしまいました。

もう一匹の蛙も同じように落ちたのですが、しかし何とかしようと思ってもがいて足を蹴って一生懸命泳ぎました。すると足の下が固まりました。ミルクがチーズになったのです。それでピョンとその上に乗って外に飛び出せました。

(岸見一郎『アドラー心理学入門～よりよい人間関係のために～』KKベストセラーズ)

楽天主義とは、どんなことがあっても、何とかなんと根拠無く思っている状態で、自分で何とかしようとはしません。一方、楽観主義とは、どんなことがあっても何とかしようと行動することです。

天にまかせて何もしないか、可能性にかけて行動するかの違いです。

溺れた蛙は悲観主義です。悲観主義と楽天主義は、結局は同じなのです。現実を見て諦めるか、現実を見ないで何とかなんと妄想するかです。楽観主義は、現実を見据えて、なお、自分に何ができるかをかんがえて、希望を持って、行動することなのです。楽観主義である人が教師をやり続けられるのかもしれませんが。(荒井)

## CONTENTS

### ◇特集 教師をやり続けるために必要なこと◇

逆境を乗り越え、楽しむ力に

「子どものために」

教師をやり続けるために必要なこと

教師をやり続けるために必要なこと

教師をやり続けるために何が必要かを考えてみたら…

ブラックの向こう側にあるやり甲斐

自分の仕事が正当に評価されること

加藤英介・・・・・・・・・・ 2

宮本 哲・・・・・・・・・・ 4

鈴木基久・・・・・・・・・・ 7

吉田雅直・・・・・・・・・・ 9

堀井克也・・・・・・・・・・ 11

根無信行・・・・・・・・・・ 14

岸本ひとみ・・・・・・・・・・ 17

### ◇連載◇

考える力をつけるための授業の組み立て方⑩ 低学年理科的課題から高学年理科までを展望して

社会科(歴史)授業力アップ講座34 歴史の学び方(歴史研究論文)②

リレー連載「来年度の全国大会講演者・新井紀子さんについて」

「一に読解、二に読解、三四が遊びで、五に算数！」

第19期先生のための学校・理科「低学年理科的課題から高学年理科までを展望して」

局長・常任委員長だより

学力研カレンダー

荒井賢一・・・・・・・・・・ 19

深澤英雄・・・・・・・・・・ 21

山口左知男・・・・・・・・・・ 23

岡本美穂・・・・・・・・・・ 25

・・・・・・・・・・ 27

・・・・・・・・・・ 28

## 逆境を乗り越え、楽しむ力に

加藤 英介

### 今年度の仕事

勤務校では、今年度、育休や退職、体調不良などさまざまな事情で人員が不足している。自分の主な仕事は、総合的な学習の時間の専科・授業研究主任・ICT主任だが、十一月からは、六年の担任としても働いている。この話をする、他の先生方からは「すごいですね」「先生だからできると思う」という応援の声をもらった。一方で「どうして、引き受けたの。やめておけばいいのに。無理しないでね」と心配してくれる先生もいた。それでも、引き受けたのには理由がある。

それは、僕自身、初任からずっと多くの先生方に、助けられ、支えられ、きたえてもらった恩があるからである。保護者とトラブルになったときに、真っ先に頭を下げてくれた学年主任、学級が落ち着かなくなつたときに、支援してくださった四役の先生、急遽休むことになったときに入ってく

ださった他学年の先生など、失敗ばかりの自分にいつもやさしく励ましサポートしてもらった。一日が終わると「今日も迷惑をかけてすみませんでした」といつも謝っていました。しかし、先輩の先生方からは「気にしないでいい。わたしもそうやってたくさんの人に助けられたから今がある。だから、経験だと思って一年乗り切ろう。そして、後輩が同じように困ったときにはサポートしてあげてね」と言われた。

そのときから、僕は学校のためになるのであればどんなことでも取り組もうと決めている。困っている人がいるのであれば、助ける。大変だと思うことも、やってみなければ何が大変かもわからないからだ。「頼まれごととは試されごと」という言葉があるように、まずは挑戦あるのみなと思い、無我夢中で働いている。

実際、週に20時間の総合と合間を縫っての6年のクラスの授業、業後は各学年の

総合の打ち合わせや出前授業など外部との連絡など充実した毎日である。そんな日々を送っていると、いつも以上に周りの先生方が助けてくれるようになる。お願いすることが多くなり、先生方への負担も増しているにも関わらず「英介先生のおかげなら」と嫌な顔せず引き受けてくれることが多くなつた。最近「今日は、どんなことが起こるかな?」とわくわくしながら毎日を楽しんでいる。

### 大切なのは・・・

今回のテーマである「教師をやり続けるために必要なこと」を自分なりに考えた。その結果、大切なのは「楽しむ力」である。以前、参加した学力研の講座で岡本美穂先生は『楽』には二つの読み方がある」とおっしゃっていた。「二つは、ラクをする。もう一つは楽しむのである。楽しむためには、苦しい時期があること、悩む時期があること、もがくことがあることが必要である。それがあるからこそ本当の意味で楽しむことはできる。」とも伝えていた。話を聞きながら、「もつと楽しもう」と心に決めた。授

業に対しても、生徒指導に対しても、職場の人間関係づくりでも、楽しむことを大切にして進めてきた。

授業であれば、うまくいかないのは当然であり、常に修行である。自分で考えたところで限界はある。だから、学年の先生に聞いたり、授業の上手い先生に指導いただいたりしている。また、学校外の研修や学力研のようなサークルなど全国の一流の先生に会いに行くのである。これを繰り返すことで、できないことが少しずつできるようになる。各教科を極めて、漢字や計算など超具体的な指導を極めてよい。もしくは、ミニゲームなどコミュニケーションスキルやつながりを高める実践でもよい。何か一つ、自分のものにするそこからできることが波及していくものである。

生徒指導では、授業妨害や不登校、身体的・精神的な悩みを抱えている子など、セミナーや本を読んでも、その通りにいかないことが経験上ほとんどである。子どもを何とかしようと思えば思うほど、遠ざかっていく場合もある。その子の願いを考えつつ、動き出すまで待つことが大切である。

この「待つ」ということがどれだけ難しいことだろう。言い換えれば、教師がゆとりをもつて指導にあたるともいえる。この余白ができるかどうかである。うまくいかなくて当たり前。うまくいけばラッキー。そう思つて毎日の変化を楽しんでいる。

職場では、先生方と多くのコミュニケーションを取っている。朝の挨拶、コーヒード雑談、補助が入ったときには子どもたちのよさを担任にプレゼントなどをしたり、先生同士の仲を深めるためにカードゲーム大会を開いたり、先生の趣味を紹介してもらったりと楽しい雰囲気もつくっている。（もちろん、真面目に授業づくりや学級づくりについても語っています。）

昨年度、同じ学年を組んでいた2人の先生は、今年度、生き生きと輝いている。S先生は去年学級が難しくなり苦しい思いをしていた。しかし今年は、その苦しさをバネにしてあたたかく楽しいクラスを実現している。B先生は、三年目とは思えないほど、学習指導・生徒指導・学年のコミュニケーションと多岐にわたって活躍し、楽しそうに働いている。

苦しい状況や悲しい思いを経験するたびに成長し、その成長が相手に対する理解と優しさにつながる。この過程を楽しめることが教師にとって大切だと思う。

### やるのではなく続ける

「一年の計は元旦にあり」という言葉から今年の目標を決める人もいるだろう。その計画から一か月。目標に向かってはどのくらい進んでいるだろうか。目標は高くもなく低くもなく、自分にできるかできないか、少しがんばればできそうなくらいが一番よい。そして、毎日できることなら尚更よい。本を読むことでも、感謝を伝えることでも何かやると決めて取り組んではどうだろうか。そして、決めたことを続ける。どんな小さなことでもいいから続けることで何かが変わる。そして、いつしか楽しくなってくる。

そんな僕の成長を支えくださっている学力研の先生方に感謝しつつ、あと一か月走り切りたいと思う。

## 「子どものために」

### 大阪教育サークルはやし 宮本哲

#### 「若い人たち」

今、先生をしている人たちは、小さい頃からの夢が叶えて先生になった人、自分を変えてくれた、支えてくれた先生のようになりたいと思つて先生になった人、自分の親が教師でその姿を見て、その背中を追つて先生になった人など様々な理由で先生という仕事についています。そのために教員採用試験に挑戦し、受かった人たちです。努力をして先生になっています。今年度も私の勤務する学校でも何人もの講師の先生方が面接の練習を何度もして採用試験に挑んでいました。受かったときは、本当に嬉しそでした。

しかし、教師という仕事に就くまでは、

情熱をもって教師の仕事をしていこうとしているのに、なぜ、三年ぐらいで辞めてしまう人たちが多いのでしょうか。

私の教え子で小学校の頃から先生になりたいという夢を持つて頑張つていた女の子がいました。卒業文集にもそのことを書いていました。成人式の時に合った時も教育で大学で先生になるために頑張つていまして話してくれました。そして、念願の先生になることができました、と伝えてくれました。私も夢を叶えることができたのだと思います。私も嬉しく思っていました。しかし、三年間で辞めてしまいました。理由は、子育てに専念したいということでした。産休、育休という制度を使えば、辞めなくてもいいは

ずです。しかし、悩んだ末に退職の道を選択してしまいました。この三年間の間に多くの経験をしたのだと思います。自分の思つていた教師像、子ども像との違いで苦しいことがたくさんあつたであろうと想像することが出来ます。彼女の大変さを思うと心が痛みますが、せつかく自分の夢をつかんだのだから続けてほしかったという気持ちが強いです。

この原稿依頼をいただいた後（一月）、新規採用の初任の先生に「教師をやり続けるために必要なことは、何か。」という質問しました。少し考えてから、彼は「適度な休み。」と答えました。四月に同じ質問をしたらこのような返答はなかっただろうと思います。どちらかというと四月は、色々な場面で強気な言動が多かつたように思います。それが学期を経るにつれ、少し元気がない言動に変わっていききました。

クラスの様子を見に行くと、学級の子ど

もたちと上手くいっていないということもないようです。しかし「適度な休み。」というような答えの背景にはどんな思いがあるのでしょうか。

若い先生が入ってきてても続かない理由は、個々によって様々あると思います。どんなことでも続けることは難しいです。けど続けるからこそ、分かること、見えてくることがあります。だからどの先生も続けられるならば少しでも長く教師を続けてほしいと思います。

私は今年度で教師になって二十七年度を終えようとしています。今まで辞めずにここまで、そして今からも教師を続けていくために考えてきたこと、してきたことなどを紹介していきます。これは、私が今まで続けてきたやり方なので参考になるかは分かりません。けれども、少しでも読者の皆様にお役に立てればと思っています。

## 「行動する」

教師になって初めの頃は、とにかく「行動する。」を心がけていました。私は、民間企業から転職して教師になったので初めは本当に何もわからない状態でした。当然、授業は下手、学級経営もできませんでした。だから自分のできることと言えば、行動することしかありませんでした。言われたことは、「はい、やります。」と答えて行動していました。

一年目は六月から、講師としてスタートしました。この年は、体育の補助、支援学級の補助、不登校の子の登校の手助けなど、何でも屋さんのなポジションでした。そして私が一番若かったため、色々なことを頼まれました。

プールの時期は安全面の確保・泳力を付けるお手伝いから週に一〇時間以上入っていました。

授業中に抜け出した児童を探し、走り回

っていました。

とりあえず、頼まれたことは、何も考えずに「やります。」と答えて行動していました。このスタンスは、今も変わっていません。(年齢を重ねると体が思うように動かないことはありますが、気持ち面では変わっていません。)

## 「言葉と出会い・人と出会う」

何も考えずに若さだけで武器に行動していくと必ず壁にぶち当たります。そのため授業の方法、考え方、生き方などを知り、自分の中に吸収していかなければなりません。私は、たくさんの本と出会うことでたくさん支えてもらいました。

若い頃は、国語であれば、文芸研、芦田教式、分析批評、一読総合法など、本を読んで、色々な方法を学び、面白そうだなと思ったものを担任している子どもたちに授業をしていました。そのような方法で授業

すると子どもたちも楽しそうにしていたので私も満足していました。しかし、色々なところから面白そうだと思う授業をするのでそこに子どもたちをどう成長させていきたいのかという教師としての思いがなく、張りぼて的な授業でした。

そのことに気づいてからは、流行り、目新しい、見栄えの授業を追い求めるのではなく、先人のたちがどのような思いで、授業や学校生活を通して子どもたちと接してきたのかを考えながら読書するようになりました。それにともない教育書だけでなく、ビジネス書など幅広く読書するようになり、多くの言葉と出合ってきました。それがその時々で私を助け、支えてきてくれました。いくつか紹介します。

「自分を育てるのは自分」

この言葉は東井 義雄氏の言葉です。自分の目の前で起こることは、良いことも悪いことも全て自分が引き寄せたもの。その現

状をよりよくしていくのは、自分を育てていくしかありません。自分の人生を作っていく責任者は自分です。周りの環境や人のせいにしても何も変わらないのです。「動機善なりや 私心なかりしか。」

この言葉は、稲盛 和夫さんの言葉です。教師の枕詞としてよく使われるのが「子どものため」です。この言葉は、学校で過ごしていると何度も聞きます。しかし、本当にそう思っているの？と思う人とも少なくありません。子どものためと言いながら自分のために言っている人が多いように感じます。子どものために授業をするといっている人が、教材研究をせず、子どもたちが授業を理解していないのにテストをして、悪い点数ならば、子どものせいにする、良い点数なら自分の手柄にする、こんなことをよく見てきました。

最近、文部科学省、教育委員会、管理職などは「先行き不透明な時代を乗り切る子

どもたちを育てる。」という言葉をよく使います。この言葉を使えば、何をしてもいいように感じます。タブレットを多く使えば子どものためになると思っている感が否めません。本当に今の目の前にいる子どもたちのことを考えたことを支持、伝達しているのかと思うことが度々です。

他にも言い出したら切りがありません。稲盛さんの言葉を借りると動機が本当の意味で子どもたちのためになっているのかということが大切だと思います。

私は、今まで「子どものために」行動し、言葉と出合い人と出会うことを何度も何度も繰り返して今まで教師を続けてこれたように思います。

このように私が続けてこれたのは多くのこと・もの・人のおかげです。そしてこれからもこの繰り返しは変わらないと思います。今まで、そしてこれからもそのことに感謝しつつ教師を続けていきます。

## 教師をやり続けるために必要なこと

鈴木基久

大学を卒業して中学校の数学科の教員として6年間勤務した。その後小学校に異動し、7つの学校で26年間ずっと学級担任をしている。「教師をやり続けるために必要なこと」について考えてみた。

### ①教科、生徒指導、部活

初任校では、中2、中1、中1を担当し、女子テニス部の担当になった。同僚に助けながら生徒指導の問題に対応し、何とか過ごした3年間だった。部活動が盛んで、強豪チームだったので土曜日も日曜日も練習があり、日曜日は終日練習のことも多かった。

中学校の教員を続けるには、「教科、生徒指導、部活動」で力を発揮できること、それが好きなことが必要な

のではないかと、当時の私は感じていた。もともと採用試験を小学校で受験していたこともあって、小学校への異動を希望した。

### ②困った経験から学びへ

小学校教員として異動したのは山間部の小規模校だった。各学年一学級のため、同じ学年の同僚に授業について相談できる環境ではなかった。当時は、総合的な学習が始まった時期だったので、校内研修も総合的な学習がテーマだった。そのため小学校の教科指導が分からないまま毎日の授業をしていた。その後、初めての1年生担任になったとき、改めて教科指導について学ばなければならなと感じていた。ちょうどその頃、同僚が「学力研の全国フォーラムと一緒に行きませんか。」と誘ってくれ

たので参加した。

困ることは、学ぶことのきっかけになる。国語の授業が分からないという困り感を、その後もずっと持ち続けていた。数年後に地元の「授業研究の会」に参加し、斎藤喜博の追求方式の授業について学ぶことで、国語授業について理解を深められた。さらに学力研のゼミナールでは、説明文についても学ぶことができ、今では困っていた国語の授業が好きになっている。

### ③学びの場

初めて参加した学力研の学習会は、百ます計算がブームになった時期と重なっていたこともあり、会場に入りきらないほどの参加者の熱気に圧倒された。分科会では、私が知りたかった具体的な教科指導の方法や各学年の実践について詳しく学ぶことができた。それ以来、毎年大阪まで行って多くのことを学んでいる。

### ④マンネリ化しないための工夫

私は前任校で3年連続3年生を担

任したことがあったが、毎年わくわくした気持ちで仕事ができた。それは、前の年にやった授業の反省を踏まえて、授業を改善していったからだ。「3年生の説明文で要約文に取り組んだらどうか」をテーマに実践し、学力研のゼミナールでアドバイスをもらい、次の実践に生かすことを繰り返したので、子どもと自分の成長を実感できた。このようなサイクルを回すには、やはり学ぶ仲間（同志）が必要だと思う。

#### ④自分の強み、弱みを知る

学力研で学ぶ中で、「リズム漢字」を作ることができた。学力研で発表し出版できたことで、教材づくりは自分の強みだと思えるようになった。反対にこれまでの数々の失敗を振り返ると、生徒指導や学級経営で苦手さや弱い部分があることを感じている。それは、学力研のゼミナールで学ぶ中で、皆さんの実践を聴く中で感じたことでもある。

「自分の強みを生かしていけばよい。」

苦手な部分は、人に相談してアドバイスをもらいながらやっていけばよい。」と思えるようになってから、随分気持ち楽になった

#### ⑤追い風、無風、逆風

自分がやってみたいことがあったとき、いつでもそれがうまくいくとは限らない。異動した1年目は、無理をせず様子を見て、自分のペースをつかむための期間にすることが多い。管理職、同僚、子ども、保護者との関係から、やりたいことを始められないこともある。逆風を感じる状況では、じっと耐えて風が収まるのを待つことも必要だと思う。自分の裁量の範囲で、自身の実践を豊かにしておくこと、アンケートを取り分析して説得力をもつ資料とすることなど次につながる準備をすることが大事だと思う。風が収まったら、自分の実践を広げるチャンスだ。校務分掌や学年内の立場も生かして提案するとよいだろう。

#### ⑥ロールモデル

2024年の冬のフォーラムで「憧れの先生」について話題になった。54才の今の私にとってのロールモデルは、60才、70才でも教員を続けている学力研の先生方だ。仕事へのモチベーションを持ち続けられるように努力したいし、土台となる健康管理も気を付けていきたい。

#### ⑦使命感・健康

私の中学校の恩師の好きな言葉が「使命感」だった。使命感とは、自分に与えられた役割や任務を「絶対に成し遂げよう」とする強い責任感や気概のことである。

「教員は子どもの前に立ってなんぼの仕事」だと思っている。だから、体調を崩さないように気を付けているし、人間ドックも夏休みに行くようにしている。自分自身の心身の健康を守るためには、無理のしすぎはいけないが、使命感を失ってはいけないと思う。もちろん多様性の時代だからバランス感覚も大事だが・・・



# 教師をやり続けるために必要なこと

大阪 吉田雅直

二十年教師を続けてきて、教師という仕事

に「しんどさ」を感じるか、「やりがい」を感じるかは、実は「紙一重」なのではないかと感じています。私も、初任の頃より、学力研に出会うまでは、基本的に教師という仕事にずっと「しんどさ」を感じてきました。そして、今年度、同じ学年の新任の先生を見ていても、日々悩み、「しんどさ」を感じているように思います。子どもや保護者という人間相手の仕事である以上、自分の力ではどうにもできないことがあつたり、予測不能ことが起こったりするので、ある程度の「しんどさ」はしかたないのですが、「やめたい」「これ以上続けていくことができない」と思うまでの理不尽な「しんどさ」は、何とかしなければいけないと思います。そこで、学力研との出会いを通して「しんどさ」が「やりがい」に変わっていった私自身の経験を思い出しながら、教師をやり続けていくために必要なことに

ついて考えてみたいと思います。

## ① 「こなす」授業から「鍛える」授業へ

私が学力研に出会って一番大きく変わったのは、授業に対する意識改革です。それまでは、授業とは、日々の業務として、「教科書を教えるという」意識しかありませんでした。もちろん、教師として子どもたちの興味・関心を引き付けられるように、「楽しい授業」を心掛けたいという気持ちは持っていました。しかし、学力研の数々の実践に出会ったことで、授業に対する意識が大きく変わりました。それまでは、「いい授業がしたい」という教師の視点だったのが、「どの子も伸ばし、きらきらと輝かせたい」と心の底から願うようになったのです。そうすると、教材研究や授業の準備にも力が入り、どんどん楽しくなってきました。つまり、それまでの教科書を「こなす」だけの授業から、どの子も伸ばし、学力を「鍛

える」ための授業へと大きくシフトしていったのです。教師の意識が変わると子どもたちが変わります。音読ひとつとっても、「この先生、なんだか音読にすごくこだわっているな」という教師の本気が子どもたちにも伝わり、子どもたちの声が変わっていくのです。そして、その姿を見て、また教師のやる気に火がつくという好循環が教師と子どもたちの間にできていくのです。テストも「これだけ教えたのだから、後は自己責任」と丸投げするのではなく、何とかして全員百点にしたいと考えることで一気に楽しくなります。子どもたちは、どの子も鍛えてもらいたがっています。「この先生は、ぼくたちを本気でかしくしようとしてくれている」と感じた子どもたちは、教師を信頼し、教師にしっかりとついてきてくれるようになります。それが、学習規律のベースになるのです。この業務として「こなす」だけの授業から「鍛える」ための授業への意識変革こそが、教師のやりがいにつながるのではないのでしょうか。

## ② 保護者とながり、信頼を得る

学力研と出会う前の私は、子どもたちとながることしか考えていませんでした。休

み時間に子どもたちと全力で遊ぶことで、子どもたちとつながり、その関係性を授業に持ち込むことで、なんとかなると信じていました。保護者との関係も、子どもたちとのつながりが良好であれば、なんとかなると安易に考えていました。しかし、子どもたちとつながること、保護者とつながることとは、全く別次元の問題なのです。

当時の保護者にとって、私は「よく遊んでくれる先生」程度の認識だったと思います。

しかし、学力研に出会い、子どもたちを鍛えるための理論と実践について学んだ私は、学級通信で、いま学級で取り組んでいることの意味や子どもたちの成長について、ほとんど発信していけるようになりました。

すると、いままで感じたことがなかったような保護者からの信頼を得ることができるようになったのです。それまで何か言わないようにびくびくしていた保護者との関係が、子どもたちの成長とともに支えるパートナーとして自信を持つて向き合えるようになったのです。これは、私にとって本当に大きな発見でした。特に年度初めの一週間は、これでもかというくらい、毎日学級通信を発行し、学力づくりや学級づくりに対する私の「こだわり」や取り組みをし

っかりと伝えるようにしています。このように子どもを介して間接的に保護者とつながるのではなく、保護者と直接つながり、保護者の信頼を勝ち取り、保護者を味方につけることができるかどうかで、子どもたちとの信頼関係や教育効果は何倍・何十倍にも高まります。子どもたちとの信頼関係づくりは、毎日の授業を通して一年間かけて積み上げていくことができますが、保護者との信頼関係づくりは最初が肝心です。新年度、ぜひ最優先課題として取り組んでみてください。

### ③ 「こだわり」にこだわりすぎない

学力研に出会って五、六年ほどして、転勤がありました。市内移動とはいえ、市のはずれの小規模校から市の中心の大規模校への転勤は、それだけでなかなかのストレスだったのですが、前任校と同じ五年生担任ということもあり、学力研として実践を続けてきた自信もあつたので、自分の教育実践への「こだわり」を前面に押し出して、学力づくりと学級づくりに全力で取り組んでいました。はじめは子どもたちも意欲的で、しっかりとついてきてくれていたのですが、だんだんとしんどくなり、子どもた

ちとの関係も悪くなって、私も体調をくずしてしまうという事態になってしまいました。いま振り返ると、それまでの経験から「こうすればこうなるはず」「これだけやっておけば大丈夫」という慢心があつたのではないかと思います。

教育実践に「こだわり」は必要だと思えます。こだわりがあるからこそ、大切なものとそうでないもの、不易と流行、いま最優先で取り組むべきこと、など、時代に流されることなく、自分の頭で判断することができるのです。しかし子どもたちの実態や保護者の願い、地域性などを無視して、「これさえしておけばなんとかなる」さらには「なんでやらないんだ」と子どもたちを責めるように気持ちがあると、子どもたちと気持ちがかみ合わず、どんなに優れた実践も、うまくいきません。「こだわり」を大切にしつつ、まずは子どもたちとしっかりと向き合い、ゆとりを持つて「こだわり」にこだわりすぎない「心の余裕」が大切なのではないでしょうか。

## 教師をやり続けるために何が必要かを考えてみたら…

春日井学力研 堀井 克也

### ◎ なぜ教師をやり続けられたのだろう…

教師の離職率について調べてみたのですが、総務省の統計によると、労働者全体の平均と比較しても教員の離職率は低い傾向にあるようです。ブラックだブラックだと言われて久しいですが、それでも教員を辞める人はそれほど多くはないそうです。

しかし、教職経験の浅い若手に限って見ると、離職率は上昇を続けているようなのです。東京都のデータでは、採用後一年以内に離職する割合は年々増えていて、二〇二四年度では五・七％に達したとのことでした。教員を志し、採用試験を突破して教壇に立っても、一年も経たずに辞めていく人が二十人に一人以上いるという事実にも、ショックを受けました。

また、精神を病んで休職する教員の数が増え続けてついに七〇〇〇人を超えたという事実も、忘れてはならないと思います。

離職まではしていなくても、休職している教員がこれだけたくさんいますし、一度休職した方が復帰するのも大変だと思います。

一方で自分自身のことを考えてみると、学年主任に厳しく辛く当たられた初年度こそ辞めることを考えた時期もありましたが、それ以降は毎年楽しく生き生きと仕事に取り組むことができています。間もなく十六年目が終わろうとしています。周囲から「堀井さんは本当に仕事が好きなんだね」「いつも生き生きと仕事していますよね」とよく言われます。(ただ、四十歳を過ぎて、エネルギーの衰えも感じつつあります…) 今回の特集テーマで原稿依頼を頂かなかったら、自分がこれだけ長く教師をやり続けられた理由について、改めて考えることも無かったかもしれません。授業における発問もそうですが、問われることって本当に大切なんだなと気付かされます…。

### ◎ 学びで世界の見え方が変わる

一つだけ確信をもって言えることがあります。それは「**学び続ける**」ことこそが、教師をやり続ける…それも、ただ続けるだけでなく、情熱をもって続けるために必要だということです。この学びも、外から押し付けられた学びではなく、自ら進んで学ぶタイプの学びでなければなりません。学び続ける教師には、そうでない教師には無いある種の雰囲気というか、オーラのようなものが備わると私は信じています。そしてそれは、子どもにも何となく伝わっているのではないかと、経験的に感じています。あらゆる学びについて言えることですが、学べば学ぶほど「**世界の見え方**」が変わっていきます。例えば私は物語教材の授業が大好きなのですが、教材を深く解釈すると、教材そのものの見え方が当初と変わるだけでなく、それを通して自分の今生きている世界の見え方と、その世界との関わり方が少し変わります。例えば光村五年『たずねびと』の教材解釈を通して、以前よりも、日本がかつて経験した戦争と原爆投下、さらには今も世界で起きている戦争や紛争に

ついでに関心が高まりました。以前なら読まなかったような本も読むようになり、「自分にも責任の一端があるのだ、当事者の一人なのだ」という感覚を得ました。ここまて来ると、どのような授業をすれば子どもたちにもこの感覚の一端でも味わわせてあげることができるのか…と、授業づくりに向けてやる気が湧いてくるのです。

様々なことを学べば学ぶほど、教師としてできる仕事の幅や深さが増していくように思えます。そうすると、若い頃よりも教師という仕事のやりがいが大きくなっていくように感じるのです。日々、辛いことやしんどいことはもちろんありますが、やりがいがある心支えになるかもしれません。

### ◎ 学びに開かれた心と体をもつこと

では続いて、「学び続ける」ためには何が必要なのかを考えてみましょう。

私にとって教師人生一つ目の転機は、教員二年目に同じ職場に学力研で学んでいる方が赴任してきたことです。私が「通信教育で免許状を取ったので、専門と言えるものがないんですよね…」とつぶやいたのに対して、その方は「それなら、夏休みに大

阪まで勉強しに行かないか？」と誘って下さったのです。それが学力研の全国フォーラムだったのですが、今考えるとよく大阪まで出掛けていったな…と思うのです。もちろん、その方の日頃の姿を見ていて、いいな、あんな先生になりたいな、と思っていたのも大きかったです。けれど、人が良いと思うものを薦めてくれた時に「はい」と素直に応じられるような、いわば**学びに向かって心が開かれた状態**にあったことが、あの時大阪まで行ってみようと思えた一番の要因だったような気がするのです。

その後もいろいろな転機がありました。そのどれもが、自分からつかみに行ったとか、心待ちにしていた飛びついたとか…そういうものではなくて、人から薦められたり、パツと目の前に飛び出してきたりしたものを、素直に受け取っただけのような気がします。中には少し勇気が要る瞬間もありましたが、後でふり返ってみると「あれが人生の分かれ道だったんだなあ…」と、嬉しく、誇らしく思い出されるのです。

**心だけでなく、体も学びに向かって開かれていることが大切です。** どういうことが

というと、過労だったり睡眠不足だったり二日酔いだったりすると、イライラしやすくなってしまう。仕事に支障が出るだけでなく、学ぶ意欲も湧き辛いです。ですから、健康的な生活を送ること、送ろうと努めることが大切です。（自戒の念を込めて…）

また、生活の中のとあらゆる余白を、スマホを触ることで埋めてしまうと、自分の外側からやってくるものを素直に受け取る余裕が無くなってしまう。スマホから学びのきっかけを得ることも無いわけではありませんが…余計なことに時間と関心（人間の関心は有限である、という考え方を最近知りました。有限だからこそ、有意義に使いたいですよね）を奪われてしまうことは避けたいと思います。スマホを手放して運動したり、ボーっと考え事したりする時間を作ることも、大切です。

### ◎ 教師という生き方を「哲学する」

前節で、学びに向かって開かれた心と体をもつこと、そして人から薦められたり、パツと目の前に飛び出してきたりしたものを素直に受け取ることの大切さについて述べました。しかし、そうすると「自分の外

側からやってくるものに、うかつにはいはいと飛びついていて本当に大丈夫なのか？」という懸念も湧いてきます。「あなたはまだ幸い経験が無いかもしれないけれど、世の中には悪い人もいっぱいいるんですよ」と言いたい人もいるかもしれません。その通りだと思います。だからこそ、何を受け取り、何を受け取らないのか自分自身で考え、決めていく必要が生じます。

法政大学の児美川孝一郎教授は『教育改革』は何を改革してきたのか』に、次から次へと降りてくる「教育改革」によって、現場の教師たちはいわば「改革疲れ」のような状態に追い込まれていると書かれています。また、そうした「教育改革」の大部分は、現場の教師たちへの敬意を欠いているとも痛罵されていました。実に痛快です。こうして次から次へと上から降りてくる「教育改革」の全てを大切に受け取っていったら、果たして幸せに教師をやり続けることができるのでしょうか。私はあまり賛成できません。そこには教師の主体性が無いからです。「いいから黙って言うとおりにしなさい」と言われて、やる気は出ません。

降りてくるものの中に、もし自分が良いと思えるものがあるとしたら、それは受け取ればよいと思うだけです。

何を受け取り、何を受け取らないかを決めるのは自分自身であり、そこにその人自身の生き方や考え方が表れてきます。ですから、教師をやり続けるためには学び続ける必要があります、学び続けるためには、教師としての生き方や考え方について、深く深く考えていく必要があるのです。（これとは全くの真逆で、自分の頭で考えることを完全に放棄して生きていく…というのも、教師をやり続けることだけを目的とするならば、有効な戦略なのかもしれません）

ここ数年、哲学に対する関心が高まりつつあります。NHKの「Q」こどものための哲学」という番組は毎年欠かさず子どもたちと一緒に視聴しますし、最近だと春日井学力研の山口先生に薦められて『水中の哲学者たち』という本を読んで感銘を受けました。有名な哲学者たちの書いた名著を開くと最初のページで頭がクラクラしてしましますが、私でも読めるような本を通して、「哲学する」ということを学んでいます。

す。それは、本当に簡単に言えば、「自分の頭で深く考える」ということです。これがなかなか難しく、ついどこかで聞いたり読んだりした誰かの言葉で考えてしまします。それを頑張って手放して、自分の言葉を探しながら、考えます。自分の頭で考えるというのは決して一人だけで考えるというわけではありません。誰かと対話しながら、自分と他者の考えの違いに気づきながら、考えるのです。教師としての生き方について「哲学する」のです。

教師をやり続けるためには何が必要なのか、という入り口から始めて、最後はなんと教師という生き方を「哲学する」という話に到りましたが、これは今とても大切なことだと考えています。昨今、自分の頭で考えない人が増えていてと実感しています。周りをキョロキョロ見回すばかりで、自分で考えたり、自分に問いかけたりすることが忘れ去られようとしているのです。

この文章を読んだみなさんが、自分の教師としての生き方について少し考えてみようかと思っただけなら幸いです。私はまだまだ教師をやり続けようと思いました。

# ブラックの向こう側にあるやり甲斐

大阪 根無 信行

## 一、はじめに

教員採用受験者数が、十年前の半数・・・など、新採用教員のなり手が少ないことは事実です。大阪では採用年齢制限をなくしたにもかかわらず、志望者は増えません。若い人に限らず、教員になることを希望する人は減っているようです。その理由のひとつは、「教師の仕事はブラック」というイメージが広がってしまっていることがあると思います。

「ブラック」と噂される原因を検索してみました。すると、「長時間過密労働」とか、「残業・持ち帰り仕事が多すぎない」「などが上げられています。が、そもそもそれらは「教員不足」でなければ、解決するはずの要因です。また、「ペアレックスがモンスター」や「学校はもう時代に合わない」などの情報も検索すると出てきます。けれども現場にいる私たちからすれば、これはいわゆる『ブラック』と呼ばれる直接の原因ではないと思っています。本来教師の仕事、

目の前の子どもと向き合い、「人格の完成」をめざす教育を通して子どもを伸ばすことに時間をとれないほど、めざすものからずれた仕事や会議に追われ、保護者とも向きあえない、長時間過密にしても終わらない、授業準備や採点を持ち帰る。そんな、腑に落ちない「多忙さ」が、教師の仕事のブラックなイメージをつくってしまったのかも知れません。

## 二、教師を続けなくなってしまうこと

私は20年以上教員をしています。教師として、授業力やコミュニケーション力、子どもへの生活指導力などに長けてるわけではありません。決して、謙遜などではなく、授業や学級づくりがうまくいかないことはたくさんありますし、先輩はもちろん後輩や採用されて間もない若い先生でも、とても上手にクラスづくりをされていて、今でも学ばせてもらっています。それでも、30年近く教員を続けられてきたことと、

今、若い先生が辞めてしまうこととの違いは、この20年の学校現場の変化を見てきたか、知らないか、だと思っています。

私が勤め始めた頃は、「放課後」がありました。その時間に、教室に残る子どもと話したり、運動場で遊んだり、勉強が苦手な子とは宿題を一緒にしたりして過ごしました。提出されたノートを点検して、学年会をして、明日の授業準備をして学校を出ました。クラスが落ち着かないこともありましたが、家庭訪問をして保護者の方に励まされたり、職場の先生に授業を見せてもらったりすることもありました。それが、今は放課後に子どもを残してはならない、週のほとんどが会議や出張研修、学年集団が集まる時間が無く個別化、かと思えば働き方改革のもと、学級通信は出せず、家庭訪問はなく、目の前の子どもに合ってる、合っていないかわからず、取り入れなければならぬスタンダードといわれるものを授業に組み入れなければならないなど、学校で行われることが変化してきました。そこが、「ブラックに変わってきた」のです。私たちは、その変化を運良く「見てきて」いるので、これは知らないな、とか、こっ

ちの方がいいな、とか判断材料があるため、不自由ながら、納得のいく方法で取り組みます。ところが、採用されたばかりの人は、放課後がなく、会議が多く、「教員評価のための自己申告シート」の提出と面談を定期的に求められ、そのための授業をし、遠足の候補地も選べず、保護者とながりにくい、「今」が当たり前なのだと思ってしまう。それは以前にはなかったことなのですが、近年採用された人にとっては、初めからある「大変」なので、「下ろされてくる仕事に追われる、自分は仕事をうまくできない、子どもが伸びない」と、気づかないうちにその大変さをため込んで、悩んでしまうのです。

こんな先生になりたい、こんな授業をしたい、という思いでなった教師本来のやり甲斐のある仕事をする余裕が与えられないまま、「大変」な業務を「当然」のように課せられては、辞めたいと思ってしまうのも無理はないのかもしれない。

### 三、教師をやりつづけるために

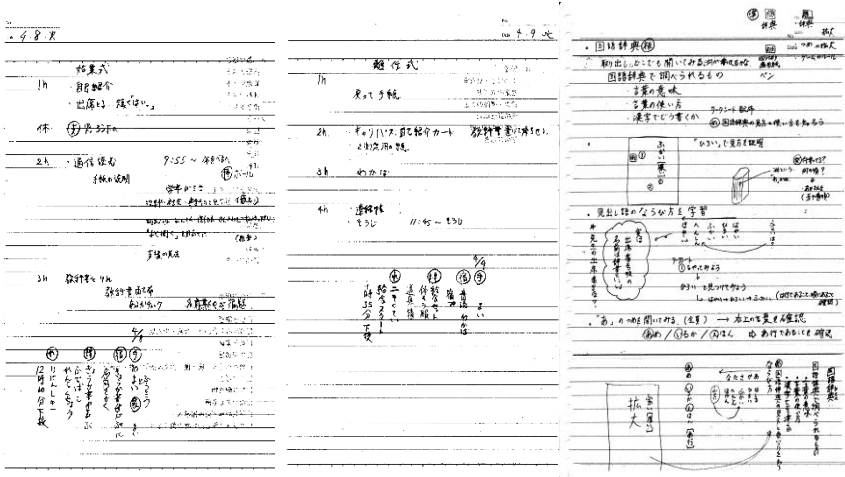
そんな現代の学校で教師をつづけるためにできることは、まず、今の教師の仕事を、

「子どもを伸ばす」ことにつながる仕事なのか、そうでないのかに分けてみることで。子どもを伸ばす取り組みには仕事として時間をかけ、そうでないものはあつさりと作業にします。自分一人で判断するのも不安なので、同僚や信頼している先輩に相談してください。今年度も、ICT活用、デジタルリテラシー教育、授業でのAI活用、小中一貫、個別最適化学習、自由進度学習、探求活動・他、盛りだくさんの研修が、同じテーマで複数回にわたっておりました。これらの研修のまとめは、一律に、「みなさんで考えて授業に取り入れていくください」でした。今までの枠組みの中に、すべて授業に取り入れるなんて、できるでしょうか。いくらい取り組みでも、何かを取り入れるためには、何かを減らさなければなりません。若い先生は、そう言われても、「しなければならぬ」が先に思い浮かぶと思うのです。そうすると全てを詰め込もうとして、時間が過密になるので。同じ授業づくりでも、音読、書き取り、計算は、不易に行われている教育活動だと思っっています。学校はいつまでも同じ事をやっている、のではなく、子どもたちに力

をつけられる手立てだから、今でもやるのです。新しいものを取り入れたくなる心情は分かります。研究授業で、「今回は新しい方法でICT機器を個々に子どもが使用しており、一人ひとりがいきいき活動していましたね」、などもよく聞きます。でも、教師としては毎年変わらないこれまでの活動をしていたとしても、今受け持っている子どもたちには、初めての経験であるはず。ICT機器を使わない授業で、また、自由進度でなく一斉授業で、子どもたちの学力を伸ばせなかったという反省が上がつているわけでもありません。子どもたちを伸ばす活動とそうでないものを話し合って分け、大事な活動をこつこつ続けることがいいと思います。

次に、1年間、学校の流れを簡単に記録しておくことです。年度のサイクルがあるのが学校です。また、小学校は入学してから卒業まで6年間というまとまりがあります。教師の仕事に就いて初めの1年はどんなものか分からないので、授業や学校行事を行うためには、準備や先回りすることが難しいです。でも1年間の流れがわかると、どれくらい前から準備にかかるといいか、

子どもがつまずきやすいポイントは何かという経験が生かれます。ずいぶん対応しやすくなると思います。学力研の先輩に教えていただいた方法ですが、私は、記録したノートをもとに、また次の年も、先の予定



を簡単にノートに計画しています。1日でB5サイズ1ページくらいに収まります。それが、日々変わる現場や目の前の子どもたちの様子に合わせた、手立ての整理になっていると思います。

最後に、教師の仕事に「やり甲斐」を見つけられたらいいと思います。自分が教育実習に行ったときに担当してくださった先生が、「実習を通して、教師っていい仕事だな、と思ってくれたらいい。」とおっしゃっていました。その実習終わりの感想が、今でも残っているのだと思います。受け持った子どもたちが、勉強してかしくなる、できるようになって喜ぶ姿を見せる、子どもたちの力が伸びた実感が、「やり甲斐」につながります。先ほども書きましたが、小学校なら6年間のまとまりがあります。担当した1年で取り組んだ結果、子どもの伸びが現れない時があるかも知れません。でも、子どもの成長はそんなものでもあるのではないのでしょうか。今年の学年で取り組んだ成果が、次の年、3年後、もしかしたら中学生になって現れることもあるでしょう。1年間で教科を履修させることに重点

を置くのではなく、またそれを自己評価にせず、実践を通して、何年か後も見通してどの子も伸ばすことが教師の仕事のやり甲斐だと思えると、まだまだ教師を続けることができるのではないかと思います。

#### 四、おわりに

学力研などのサークル活動のような、いわゆる職場の外の学びは、教師の仕事をつくる原動力になっています。教師の仕事にも、転勤はあります。初任者ではなくても、転勤したときの「分らない」違和感は、慣れないことから起きます。長く前の職場にいたことで、慣れすぎたことが、転勤先との違いについて行けないからです。そうなる前に、サークルで交わされる新鮮な捉え方や、新しい取り組み、不易な取り組みの本質を交流することで、ブレずに新しい環境にも向きあえる、そのことはとても大きいと感じています。迷ったら、聞く。聞ける人がいる。ひとりではない、仲間がいる安心感、それに支えられて教師を続けてこられたのだと思っています。



## 教師をやり続けるために必要なこと

### ★自分の仕事が正當に評価されること★

#### 加印 いろえんぴつ 岸本 ひとみ

なかなか難しい企画をいただきました。

昨今、教育職はブラックだと言われる中、続けることの困難さをひしひしと感じます。この仕事しか知らない私にとっては、他職との比較もままならない……。はてさて、どうしたものかと悩みました。

最終的には、開き直って、なぜこの仕事を続けられたのかを、みなさんにお伝えしたらいのではと、考えました。職歴だけは、いたずらに長いのが私の取柄じゃないかと、半分苦笑いしています。

#### ◆20代 早く1人前になりたい

第二次ベビーブームの子どもが、小学生になる1980年に、大量採用されました。同輩の中には、最初から技量も志も優れた人もいて、自分が遅れをとっていることは明白でした。何をやっても、失敗ばかり。八方ふさがりの中、何とか、学力実践にしがみついて、あがいていました。

幸いなことに、故人となった岸本裕史さんとはご縁があり、「いつでも、だれでもどこでもできる」実践は、身近なものだったのです。

保護者からの評価は、若いけど、きちんと「読み、書き、計算」の指導をしてもらえるとというものでした。その頃の教え子の大人になってからのひとこと。「先生、途中で投げうつてしなかったもんな。『絶対できるんやから、継続は力』って、力説してたで。」

#### ◆30代 実力不足にふりかかる困難

子育て真っ最中の30代は、なかなか厳しいものでした。一番大変だった思い出。6年担任で、明日は年度初めの学級懇談会、PTA学級役員の方と打ち合わせをしようという直前に、わが子が熱性痙攣を起こし、救急搬送されたことです。

えてして親が忙しくて、緊張している時

ほど、わが子も体調を崩すもの、ということとは、この時に身をもつて知りました。翌日は何とか出勤できたものの、参観授業も学級懇談も上の空でした。

それから、33才にして学年主任になってしまったこと。療養が出て、担任が交代したためでしたが、「えつ、なんです！」と心の中で絶叫したのを覚えています。

学年経営をしなければならなくなった時にも、私のよりどころとなったのは、「読み、書き、計算」の基礎をきたえていくという学力実践でした。何しろ経験10年未満ばかりの学年団ですから、いっしょにできることは限られていたのです。20代で出会った、「いつ、どこ、誰でも」実践のありがたみをこの時ほど感じたことはありませんでした。

後で聞いたこと。「危なっかしい主任さんやったけど、子どもに力をつけようと、一生けんめいやったから、応援していました。」この時の保護者さんたちは私よりもちよっぴり年上です。今でも私の応援団として地域で支えてくれています。今は70

代。地域自治会や老人会の役員さんです。

#### ◆40代 研究主任への道

学年経営から、学校全体の指導に目を向ける年令になりました。ここでも、学力実践を続けてきたことが、私の支えとなりました。「いつしよにできることから、ぼちぼち進める」という視点から、学校全体を見ることができたからです。

それから、流行り廃りのある実践に、ふりまわされないということも、同僚からの信頼を得ていたようです。文科省から出てくる、矢のような「教育改革への指針」に対しても、現場でできることと、できないことをきっちり分けて、できることだけを提案するようになりました。

この頃になると、地域や同僚、保護者からの評価は、担任してもらったら、力がつく先生、となっていたため、けっこう無理も押し通せるようになりました。

#### ◆50代 教務ですか？

同輩が管理職になってしまっって、平教員が少ないので、仕方なく「教務主任」に。でも、担任できないのならない、という

方針でした。たださえ、年下の同僚ばかりなのに、担任を離れると、どうしても、同じ目線で苦しいことを共有できなくなってしまうのが怖かったからです。中には、担任ではなくなっても、ちゃんと同僚性を発揮できる優れた教員もいますけど、私はそれほど優れた人間性を持ち合わせていません。

教務をしながら、実践していると、学校の中の無駄なことがよく見えるようになりました。地域や保護者との連携、管理職との調整など、目には見えないけれど、大事な視点を身につけることができました。

この時わかったこと。保護者の一番の要求は、「学校で、わが子が賢く健やかに育ってほしい」ということでした。猫の目のように変わる流行の実践をしてもらってもけっこう。ただ、子どもが楽しんで、力をつけてくれれば、それでいい、という願いの本質を見ました。

#### ◆60代 ワガママ、暴走老人へ

そして、現在。年末になると、毎年翌年の講師登録の電話が、何本もかかってきま

す。人手不足なので、文科省の指針を全然気にしない暴走老人でも、とりあえず1年間学級担任を任せられるなら、喉から手が出るほど欲しい、ということでしょう。最近、退職した管理職の口コミで、全然知らない地域からも電話がかかってくるようになりました。

それもこれも、子どもたちの「できた、わかった、つながった」を毎日見ることが楽しみに、実践を続けてきたおかげでしょう。

#### ◆「やりがい搾取」が一番ダメ

子どもの成長を見続けることができる素晴らしい職業なのに、その機会を奪ってしまふような現在の教育政策(施策)とは思えないのですけれどこのために、やりがいを搾取されるから、みんな辞めてしまうのではないでしょうか。

正當に実践が評価されれば、少々苦しくても、何とか乗り切れるものです。学力研でぜひ、やりがいを見つけてほしいものです。

## 低学力問題に対して理科専科としてどう取り組むか

「理科」とは何を教える教科か？

理科とは、理由を考える教科だと、私は考えている。

なぜ、空は青いのか。なぜ、物は下に落ちるのか。なぜ、月は日によって形が変わるのか。などの自然現象や物理現象などに、なぜと疑問を持つことができ、その理由を考えることができ、さらに、その疑問や観察や実験に解き明かしていくこと、それが理科や科学なのではないだろうか。

ただ、あの人はなぜいつもすぐに怒るのか。なぜ、あの人は勉強ができるのか。みたいななぜは、理科では扱わない。人間科学や心理学などでは扱うだろうが。

では、学校教育で、理科や科学を教える必要があるのだろうか。

私はある、と考えている。なぜかといえば、結論から言うと偏見をなくすためである。自然現象、物理現象のなぜを考えると、様々な理由を思いつくことができる。

毎日、見ているはずの空の雲や太陽や月だつて、なぜと問われると、子どもたちは様々な考えを出すけれど、それぞれの考え同士では矛盾が発生する。でも、どの理由・考えが正しいかは、多数決では決められない。その理由・考えが正しいかどうかは、観察や実験で確かめるしかない。科学的見方が、偏った考え方をただせるわけである。

「理科」や「理」を辞書で調べてみると

理科：自然のことについて学ぶ教科。

『例解学習国語辞典』

「理」も「科」も二年生で習う漢字である。

自然とあるが、物理現象も自然と言っているのだろうか。

理科：自然現象・自然科学を内容とする学校教育における教科の一つ。また、物理、

化学、生物、地学などの科目の総称。広く、人文科学、社会科学以外の学問の分野。

『日本国語大辞典』

物理現象も自然科学に含まれるのだろうか。この説明はしつくり来た。ちなみに、「理科」の対義語は「文科」である。

文科：哲学、史学、文学など数学・自然科学系統以外の文化に関する学科。法律、経済、商科などの学科を含めている場合もある。

『日本国語大辞典』

文系に対する理系は、ここから来ているのだろう。

漢字の「理」には多くの意味があるが、理科の理に当てはまりそうなのは、

理：道理。ことわり。

『漢辞海』

「道理」よりも「ことわり」の方が近い気がする。「ことわり」は要するに、「理由」となるだろうか。

やっぱり、「理由を考える教科」が「理科」でよさそうである。

## 低学年理科と生活科

現在、理科は中学年から始まる。私が小学生の頃は、低学年でも、理科と社会があった。（生活科は存在しない。）

低学年理科は、昭和16年（一九四一年）〜平成3年（一九九一年）、ちょうど50年間（半世紀）行われていた。

現在、低学年理科が必要かどうかの論議は置いておく。なぜなら、今後、生活科が廃止され、低学年の理科や社会が復活するとは思えないからである。



それならば、現在の生活科で、中学年理科につながるような学習の仕方を提案した方が有意義だろう。上が小学一年生の生活科の教科書（啓林館）の内容である。理科につながる、りそうなのが、「わたしのはなをそだてよう」「なつとなかよし」

し」「生きもの大すき」「あきとなかよし」「ふゆとなかよし」である。一年生の生活科は、理科とつながりが多いのだ。



『わくわくせいかつ 上』（啓林館）の「わたしのはなをそだてよう」に、理科的知識があるかどうか教科書を見ていく。「たねをまこう」のページに、「たねのまきかた」が載っていた。「まなびのひと」と書いていますが、これはヒントではなく、「たねのまき方」の知識である。3年理科の「たねのまき方」は上の通りである。「たねの大きさ3つ分」というのは、小さいタネなら当然浅くなるし、大きいタネなら深くなることになるので、理にかなっているわけである。



視点」が載っていた。この視点をしっかりと身につけるだけでなく、今後の理科の学習に役立つのだが。

次のページの吹き出しに、「こんなふうにめがでたよ。」とあるが、やっぱり「め」の説明はない。生活科の教科書にも、理科につながるものはあるが、その内容は不十分であり、理科的語彙の定義も載せられていない。要するに、生活科を教える先生次第で、理科的知識や考え方が身につくかどうかが決まるのである。

歴史の学び方（歴史研究論文）②

学力研常任委員 深沢 英雄

一、子どもの調べたいことを最優先する

取り組みの4段階

（一） テーマを決める 十二月中  
「心ひかれた人物について」「興味のある  
歴史について」

（二） 調べる 一月末まで

・ 図書室の本（伝記・歴史資料集・百科  
事典）教科書、新聞

・ 地域の図書館の本、書店

・ 記念館や資料館に手紙を出す

・ インターネット、古本屋

・ 本や資料を読み、必要事項をノートに  
書く

（三） まとめる 二月末まで

・ 下書き

・ 清書

・ 製本

（四） 発表する 三月上旬

（一） テーマを決める

ここで時間がかかります。男子の場合、  
比較的戦国時代の人物に、女子は、女性  
人物の生き方に興味を示す傾向がありま  
した。何を書いたらいいか、分からない  
子には、その子が関心をもっていること、  
社会の授業でおもしろかった時代につい  
て話をしていきます。すると、しだいに  
テーマがしぼれてきます。人物だけでな  
く、ピアノを習っている子が音楽をテー  
マに、新体操のレッスンを受けている子  
が新体操の歴史をテーマにしました。  
（戦国武将）織田信長など（幕末・明治  
維新）坂本竜馬など（歴史上の日本女  
性）卑弥呼（外国の人物）アンネフラン  
ク（歴史）新体操など

（二） 調べる

本や資料を探すのが大変です。まず、  
子ども向けの本と図書室で調べます。そ

の次に地域の図書館や本屋で本を探しま  
す。私が図書館にいった、子どもたちか  
ら頼まれた本を借りてきたり、コピーも  
しました。音楽の歴史の調べた子は、音  
楽の先生から本を借りていました。お母  
さんと本屋や古本屋めぐりをした子もい  
ます。博物館に資料を送ってもらうよう  
に手紙を書いて子もいました。

本や資料を読んだことをノートに書い  
ていきます。

（三） まとめる

プロットを立て方を指導します。形式  
はつぎのようにしました。

◎目次（二枚）

◎はじめに（二、三枚）

研究の動機Ⅱ人物（歴史）を選んだ理  
由と調べてみたいことを書きます。

◎章立て（二十枚）

三章から五章くらいの章立てをさせ、  
章の中をいくつかの内容に区切ります。  
おもな業績、人物のあらまし、人物に対  
する自分の考えや疑問をつづらせます。

◎終わりに（三・四枚）

人物を調べてわかったこと、考えたこ

と、論文を書くなかで成長したことなどを、総括的に書かせます。

### ◎参考文献（一枚）

調べるのに使った書名を書き出します。

### （4）発表する

最後の授業参観で、卒論発表会をします。持ち時間は一人一分です。論文をもとに、一分でしゃべることができる原稿を書きます。絵や図を用意した子もいました。

授業参観のあと、保護者の方から

『卒業論文』を書いているんだよ、と子どもから聞かされたとき、作文の少し長いものを書くんだぐらいしか思っていないませんでした。ふだんほとんど本を読まない子なのに、卒論を書くための本を借りにいたり、書店で本を買ってたり、がんばっている姿を見ることができました。卒論発表会でも、織田信長について一生懸命まとめたことを発表する姿に驚きました。家で論文を読ませてもらおうと思っています。うんとほめてやります。ありがとうございました。」

二、知的好奇心が刺激される取り組み

「おわりに」で、子どもたちは論文でわかったことと論文を書くことをとおして学んだことを書きます。

「終わった。第三章、最後の文字、そして丸を書き終わった。わたしはこのひとことをあげてしまいました。」

この子の達成感が伝わってきます。

「調べて、調べて、調べぬいたけれど、また新しい分からないことができてきました。」と書いている子もいます。新体操について書いた子は

「わたしがこの論文を書いて『これこそ』と感じたものがあります。それは『新体操は自分達一人ひとりを育てていくスポーツ』ということです。これは、わたしがこの研究論文を書いているうちに自然にできた考えです。どういうふうに着ていくかは、人それぞれだと思います。その人が、育てていきたい方向に着ていくのではないのでしょうか。」

この論文を書くなかで、自分なりに新体操について考えを見つけたのです。本を読み、まとめあげていくを通じて、

思考力が育ち、知的好奇心が刺激されていくのだと、あらためて感じました。

### 三、歴史研究論文への「追試」

学力研の加藤先生が私の「卒業論文」の実践を追試してくれました。有難いことです。

「社会科で歴史上の人物や偉人に学習したことを新聞にまとめることはしていたが、論文にまとめるということはなかった。この論文は、子どもたちが6年間で学んできたことの集大成として取り組ませたい。小学校生活でやったことがないことに挑戦することの意味を実感すること、「私にはできない」と思っている子たちに自信をもたせるためにも達成する価値がある。：それらの活動を通して粘り強く取り組む力、ものごとを俯瞰してみることで力を身に付け、次の学習につなげていくこと、仲間や教師とのかかわりを楽しむことが最大の目的である。しかし、具体的にどう取り組んだらよいのかも分からなかったため、深沢先生に聞きながら進めることにした。」

（次号へ）

## リレー連載「来年度の全国大会講演者新井紀子さんについて」

「一に読解、二に読解、三四が遊びで、五に算数!」

春日井学力研 山口 左知男

新井紀子さんの名前を知ったのは、二〇一五年の十二月でした。きっかけは、現在いよいよ小中学校に導入ということで物議をかもしているデジタル教科書です。

当時私の勤める春日井市は「春日井スタンダード」という上からの「教育改革」に席卷されていきました。その後全国的に（いや全国的にか）一気に広がるスタンダード

「運動」の第一波でした。春日井スタンダードの特徴は、全校での画一的な学習規律・教室環境づくりの徹底と「先進的な」ICT教育の「充実」を二本柱に教育の効率化を図り、子どもたちに「わかる授業」をつくる、というものでした。

柱の一つであるICT教育の中核になるのがデジタル教科書でした。春日井市では全県に先駆けて教師用デジタル教科書を全学年分市内全校で購入し活用していました。市内にスタンダードの拠点校をつくり、全

国に向けての研究発表を実施。その後も毎年公開授業研究会を行うとともに、市内各校に向けては教務主任、新任・若手教員を頻繁に拠点校に集め研修会を行い、実践を周知徹底していきました。そんな頃に新井さんのデジタル教科書に関する主張を知ったのです。

既に文科省では「デジタル教科書の位置づけに関する検討会議」を二〇一五年五月より開催していました。そこでは児童・生徒用デジタル教科書について論議されていました。同年二月に実施されたその第六回に新井さんはオブザーバーとして参加され、意見を求められていました。

新井さんはデジタル教科書のメリットとして挙げられた諸点について論理的に問題点を述べられていました。特に授業内容に関わる部分は、以下の4点に関してでした。要約します。

①「障碍や困難がある子どもたちに大変有益である」に関して。必要な子どもたちにデジタル化した教科書を提供する枠組みは非常に重要であるが、動画や音のコンテンツはユニバーサルデザインではない。現在のもは盲・ろう児には利用できないものが圧倒的に多い。

②「動画・音声など紙の教科書では表現できないメディアによつて学びが広がる」に関して。タブレットPCでは画面の面積に制約が大きく、複数の教材を広げて一覽しつゝ学習を進めることは困難。何よりも先行研究からスライドショーで写真を見続ける子に写真の記憶を聞いても全員が「わからない」と答えたという問題がある。

③「教科書掲載の問題の即時採点とフィードバックができる」に関して。ドリルの穴埋めと選択式問題に限られる。小論文自動採点は、論理性が高い平易な文章、オリジナリティのある文章に低い点がしばしばつく反面、全く意味不明な文章が高い点を取る場合が出てくる。何よりも、これに慣れてしまうと、すぐに答えが出てこないことにイライラしたり不安になったりするよ

うになる。

④「協調的学習が進む」に関して。グループワークにPCを持ち込むことで視線が個人のPC画面に奪われて会話が減るということが先行研究により論証されている。

以上のように使用によって生じる問題点を的確に指摘されたうえで、タブレットPCを前提とすると、デジタル教科書特に小中学校に導入することは財政負担を上回るメリットは感じられないこと、AIに代替されないような能力をどのように身につけるかを検討することの方が喫緊の課題であると明快に述べられていました。当時諸団体から執筆・報告の依頼を受けていた私にはとても参考になり、新井紀子さんという研究者に対する信頼も高まりました。

新井さんとの二度目の出会いは、二〇一八年です。ベストセラーとなった「AI vs. 教科書が読めない子どもたち」でした。本屋の店頭で見つけ即買いました。衝撃的なタイトルにも惹かれましたが、学ぶことの多い本でした。

第一に、読解力がこれから求められる学力の中枢であり、日本の中高生の読解

力が今や「危機的」と言ってよい状況」にあるという指摘です。新井さんによれば、今後AIにとつてかわられる可能性の低い仕事を考えたとき、その共通点は「コミュニケーション能力や読解力を求められる仕事」、もしくは、「柔軟な判断力が求められる肉体労働」であるとされ、中でも特に問題となるのは「読解力を基盤とするコミュニケーション能力や読解力」であるとされました。読解力の重要性は当時から学力研でもよく話題に上りましたが、改めて痛感しました。

第二に、AIと共存する社会において、教育の喫緊の最重要課題は、「中学卒業までに中学校のどの科目の教科書も読むことができ、その内容がはつきりとイメージできるようなリアリティのある子どもに育てること」だという指摘です。「今や格差というのは、名の通る大学を卒業したかどうか、大卒か高卒かというように起こるのではなくありません。教科書が読めるかどうか、そこで格差は生まれています。」という主張とともに、「教科書の内容がはつきりとイメージできるようなリアリティのある子ども

も」という目指す子ども像に共感を覚えしました。想像力と論理性の大切さです。

第三に、新井さんの読解力調査で明らかになった点です。特に以下の三点。読解能力値は中学校の間は平均的には向上するが、高校では向上していないこと、通塾の有無と読解能力値は無関係であること、就学補助率、家庭の経済状態とは強い負の相関があるということ。小学校教師のなすべきことが明らかに becoming っており、身の引き締まる思いがしました。

第四に、学校教育に何が必要かという指摘です。「一に読解、二に読解、三、四は遊びで、五に算数」「遊び」といっても、手先や身体を動かす、モノに頼らない遊びです。そして、日本の学校が誇る、給食当番や掃除当番などの班活動。それ以外のものはいらない。」少し極論ではありますが。いや社会もいる、理科をやらんでどうすると言われる方もいるでしょう。ただ義務教育学校、ことに小学校の優先順位としては確かにこうではないかと私も思います。特に「遊び」と「班活動」に強く共感しました。

夏の大会での講演を楽しみにしています。



19期 先生のための学校

先生のための学校 理科

「低学年理科的課題から高学年理科までを展望して」

事務局長 岡本 美穂

#### ■講演1 荒井先生

理科は、単に知識を習得するだけでなく、子どもたちが目の前の自然現象に「ふしぎだね」と感じる素朴な気持ちから、自ら探究し、科学的に解決する力を育むことを目標としているのだ、と改めて考え直すきっかけになりました。

#### 1. 「理科」の定義とは

「道理、ことわり、人の力では支配し動かすことのできないもの」という言葉を紹介してくださりました。理科が自然の法則や摂理を探究する学問であることを深く表しています。

#### 2. 生活科から理科へのつながり

小学校低学年の「生活科」では、子どもたちが身近な自然に触れ、「かんさつしよう」「きろくしよう」といった活動を通して、五感を使って探求する基礎的な経験を積みま

す。「観察」「記録」の活動は、理科における「知識及び技能」の基礎となり、後の科学的な探究活動につながる重要なステップです。

#### 3. 「ふしぎだね」が育む探求心

3年生の理科の教科書では「たくさんの種が紹介され、その横に書かれている言葉『ふしぎだね』にあったのは、理科教育における「問題解決の糸口」を明確に示しています。この「ふしぎだね」という問いかけは、子どもたちが自然現象に対して抱く素朴な疑問や驚きを大切に、学習意欲を高めます。また、「なぜだろう」「どうしてだろう」という疑問が、さらなる観察や実験へとつながり、問題解決の力を育むきっかけとなります。

#### 4. 中学理科

小学校では、葉脈が「身近な植物の模様」として観察され、自然への興味や「なぜだろう」という探究心を育みます。しかし、

中学校の教科書を見せてもらうと、その説明と専門用語の多さに、圧倒されます。小学校で培った観察力を土台に、科学的・体系的に学ぶのだと強く感じました。

#### 5. みんなで学ぶ理科授業

荒井先生は、実験結果において、必ず黒板に書きこむ、ということを行っているそうです。それは実験がうまくいってもいなくてもです。こういうちよつとしたところに「どの子も伸ばす」ということを大事に取り組まれているのだということがよくわかります。

#### 6. 板倉監査

「優等生本意だったこれまでの理科教育」板倉先生は、「正しい結果」を重視するあまり、子どもたちが、科学の魅力を実感できない優等生本位の授業になっていたことを問題視し、すべての子どもが科学を「たのしい」と感じられるよう、自ら予想・討論・実験を通じて科学知識を深める「仮説実験授業」を提唱されたとのこと。ここでも、どの子どもも「楽しかった」「よくわかった」と感じられる授業を目指していることが伝わってきます。

## ■講演2 久保先生

理科の教科書を用いた学習について考えました。現代社会で求められる「資質・能力」をどのように育むかについて考察しました。特に、図や資料が豊富な説明文教材としての教科書の役割と、それを活かしたノートの可能性が議論されました。

### 1. 教科書学習による「学力」

社会科や理科の教科書は図や資料の入った説明文教材として、教科書を読解し記憶することは、基礎的な学力を確立し、「学力がついたか」ついていないのかを明確に把握する上で不可欠です。

### 2. 学習先行型理科が子どもを伸ばす

「授業始めに、学習する範囲をしっかりと音読みし、教科書による『学習先行型』授業をどの子どもにも同じレベルで保証し、基礎知識を持たせる。こうしてからみんなで共通の基礎知識のもとにしっかりと実験し、検証していく授業形態がどの子ども伸ばす理科である」と私は考えます。

つまり、授業の導入として、教科書の内

容を丁寧に音読することは、その後の学習の土台を築く上で非常に大事だということです。どの子どもも、学習する単元や項目について共通の基礎知識を持つことができます。これは、子どもたち全員が同じスタートラインに立てることを意味します。

教科書の音読や内容理解を通じて、読解力と記憶力を高められます。これは久保先生が最初にお話された

「学力は人類の文化遺産」

という考え方にも通じます。

今回荒井先生も、久保先生も、みんなが伸びる学びをいかに理科でつくり出すか、ということを投げかけてくださっていました。一部の「優等生」だけでなく、すべての子どもが主体的に学びに参加し、それぞれが自身の理解度を深めながら伸びていくことを大事にされています。

### ■参加者のご感想

ノートに書くことで、実験・観察によって確かめたことのまとめができる。実験結果が理論通りにいかないときにこそ、教師の能力が問われるということが、自分にはつきつけられた大きな課題だと思う。学び直

しには教科書が大事、名古屋市が使っている実験・観察ノートに甘えている。今の授業を見直し、子どもの学習能力を伸ばすような指導をしたいと強く思いました。

ノートに書かせることは（絵も）、客観的に自分の知識を自分のものとして残すことになる。教師の要求レベルが子どもの学力を想定する。学び↓実験↓書く↓学び(教科書にもどる)↓書く(テストづくり)

### ■討議より

ノートを書けない、ではなく、担任をした日からノートに書くことを鍛えなければ、伸びるはず。このことに時間をかけることは大切。実験の結果を「文」で書くこと。楽しかったなあ、だけでは残らない。

### ■困ったことなんでも相談云々

・中学年の子どもと支援の子どものトラブルについての宮川先生の「発達の曲線」の話がとても参考になりました。

・不登校の子どもの家庭に求めるのは、家庭学習ではなく、生活していくためのリズムと家事。

# 局長だより 2月

## ◆学力研最新情報 岸本ひとみ

### ○新井紀子さんへの期待

ただいま、8月の全国フォーラムの準備作業を、急ピッチで進めています。特に、記念講演者の、新井紀子さんに、どんな内容で講演していただくかを、研究所長の深澤さんを中心に、連絡を取っています。

依頼の一部を紹介します。

教科書が読めていない現状や「次の指導要領に向けて、一人一台タブレット、果ては生成AI活用までもが頻繁に話題に上るようになり、21年から24年までの3年間で、おそらくタブレットを原因とした学力低下が起きたにもかかわらず、生成AIまで解禁したら、どれだけ日本の学力が下がってしまうのか」というお話を冒頭でお願いします。

子どもたちの現状分析だけでも、参考になることが多いと思います。そして、学力低下を防ぐために、

絶対必要な「読解力」についても、示唆があると期待しています。

### ○先行申し込みをどうするか

実は、会員さんには、先行申し込み制をとろうかと検討しています。年会費の有効期限は、3月までです。年度代わりの時期に、また4000円をお支払いいただいて、会員更新をしていただく方や、新しく会員になっていただく方には、この全国フォーラムへの申し込みを優先受付してはどうかということです。

詳細については、3月にお知らせします。

8月1日(土) 9時半開会(予)

午前 全体会

午後 学年別講座&分科会

会場 エルおおさか

谷町線・京阪天満橋駅から徒歩7分

今から予定に入れておいて下さい。

## ◇事務局だより 岡本 美穂

### ■第19期先生のための学校

2月14日(土)ラストです

「低学年社会科課題から3, 4, 5, 6年それぞれの社会科へ」

講演1

講師 深沢 英雄

和歌山大学教育学部非常勤講師

学力研の社会と言えば深沢英雄

休みたびに現地調査して教材化、事実を大切にする社会科は有田和正氏から学んだという。6年生の「歴史論文」の実践も、師の岸本裕史から学んだという。

講演2

講師 久保 齋

先生のための学校校長

3年生では、数え歌で市の地図を覚えさせる実践、4年ではゴミ処理を自然のリサイクルで、5年では知識のネットワークを広げる「〇〇の旅」と社会科満点大作戦、6年では予習による授業と、歴史学習で教室文化を知的に広げる歴史新聞実践などいろいろやってきた、子どもの本能与発達に則った社会科授業をやってきた。社会科は覚えな

ければ面白くないと語り、響感をかっている。

<https://www.kokuchpro.com/event/4ab37be8226c99c1019a18b1089c9239/>

「困った子ども、困った親、困った同僚、困った学年主任、困った管理職」困ったことなんでも相談会が大好評です。全体相談、個別相談、先生のための学校スタッフ、講師が相談に乗ります。

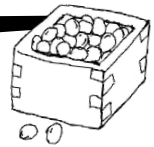
### ■学力研・春の愛知集会

3月26日(日)

対面講座のよさ、それは「感情が揺るがれねえ」です。講師の「非言語情報」が参加者の感情に刺激を与えること間違いありません。またお知らせさせていただきます。「まぐまぐ」でもお知らせさせていただきますので、お見逃しのないようにしてください。

<https://www.kokuchpro.com/event/74d4031fab82d85e99500ef65dd085fc/>

# 学力研カレンダー



《各地のサークル・部会 2026年 2月 例会、イベント》

どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしております。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

## 2/

- 20 (金) 伊丹学力研 18時半～ 伊丹市役所横サイゼリア 前田 090-9715-3830  
21 (土) 大阪教育サークルはやし 午後 エルおおさか 荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp  
27 (金) 春日井学力研 17時半～ レディヤン春日井(JR勝川駅) 山口 080-6904-1697  
27 (金) いろえんぴつ (加印) 18時半～ なんなん広場会議室 岸本 090-9117-6330

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等はご連絡下さい。

- 持ち方書き方研究会 ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を 前田 090-9715-3830
- みなみ学力研 9時45分～12時 阿倍野区民センター 図書 nobu580701@yahoo.co.jp

## 《全国キャラバン等 今後の予定》

- 学力研・先生のための学校【全5回】 会場：たかつガーデン

2025年

1月17日(土) 13時半～16時45分【済】 2月14日(土) 13時半～16時45分

- 学力研・春の地域集会 3月29日(日) 10時～16時30分

会場：レディヤン春日井(JR勝川駅)

「やっば学力！ 子どもたちを伸ばすホンモノの学力づくりを」

講師：岡本美穂 堀井克也 小川慶子 加藤英介 参加費2000円

- 春の先生のための学校【オンライン：会員限定】

3月22日(日) 4月12日(日) 5月17日(日) 【3回講座】

(詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで)

- 家庭塾『春のほっこり家庭教育カフェ』2026年2月15日(日) 13:30～

於：京都下京いきいき市民活動センター 2F 会議室

(講師派遣希望、サークル情報などは 事務局へ 079-426-5133)

※いろんなことがあるでしょうが、ぜひ、教師をやり続けてください。(荒井)

ご意見・ご感想は下記まで

荒井 賢一	E-mail aik28501@bca.bai.ne.jp
李 詩愛	E-mail iwamotoshie@gmail.com
堀井 克也	E-mail katsuya4k1h9@gmail.com
加藤 英介	E-mail hgrtd533@yahoo.co.jp